

氏名	澤江衣里
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博音第212号
学位授与年月日	平成24年3月26日
学位論文等題目	〈論文〉詩と音楽から発展的に捉える歌唱旋律の探求 ーR・クイルターの歌曲集《7つのエリザベス朝の歌》を通してー 〈演奏〉R・Quilter 《7 Elizabethan Lyrics》 1 Weep you no more 2 My life's delight 3 Damask Roses 4 The faithless sheperdess 5 Brown is my love 6 By a fountainside 7 Fair House of Joy

総合審査委員

(主査)	東京芸術大学	教授	(音楽学部)	永井和子
(副査)	〃	〃	( 〃 )	川上洋司
	〃	准教授	( 〃 )	佐々木典子
	〃	〃	( 〃 )	福中冬子

(論文内容の要旨)

初めに私はクイルターの弧を描くような旋律美に魅せられて、彼の作品を研究したいと思った。

しかし、「歌いたい」と思わせる魅力ある旋律であるので始めの取り掛かりはいいのだが、楽譜に向かってその音楽を考えれば考えるほどいかようにも歌唱出来ることに気付き、雲を掴むような難しさを感じ行き詰ってしまった。つまり、彼の歌唱旋律は四分音符や八分音符などのとても素朴な音符を用いて書かれており、ひとつひとつの音を持続する幅が広いのでその中で語られる言葉の埋め方が多様であり、それは歌い手の感性に託されていると言っても過言ではないのである。

クイルターは古典派やロマン派の韻律のある定型詩を好んで作曲している。この歌曲集《7つのエリザベス朝の歌》も7つの内4つは作詞者不詳であるものの、どの詩も規則正しく押韻されており、詩そのものに音としてのリズムを感じる事が出来る。彼はそのリズムに即した作曲を心がけたことが窺える。その素朴な旋律の中で、詩そのものの持つリズムを感じさせる歌唱が求められていると思われる。本論文は、音楽と詩が融合された、クイルターの理想とした歌唱旋律のあり方を研究するものである。

第1章では、歌曲集《7つのエリザベス朝の歌》の成立事情を調べる。作曲家が生み出す作品は、その作曲家自信を投影するものである。よってこの作品が、書かれた頃のクイルターの様子を知ることは必須である。

まず、第1節では、作曲家R・クイルターの生涯を述べ、この作曲家の全体像を押さえる。

第2節では、歌曲集《7つのエリザベス朝の歌》が作曲されたころのクイルターについて調べる。この作品が書かれた2年前に遡り1906～08年頃のクイルターの動向について詳しく調べる。

第3節では、テノール歌手 G.エルウェスについて調べる。この歌曲集は彼によって初演されてい

る。当時、エルウェスは非常に信頼の置かれていた歌手であった。彼がクイルターの作品を取り上げるようになり、クイルターは作曲家として、確固たる地位を築いたのである。この歌曲集は、エルウェスの母親に献呈されている。

第4節では、歌曲集《7つのエリザベス朝の歌》の詩の出典について調べる。この歌曲集を構成する7つの詩には連作性はなく、クイルター自身が選び、並べたものである。

第2章では、歌曲集《7つのエリザベス朝の歌》の分析と演奏法について考察する。考察のやり方は、それぞれ一曲ごとに①詩の解釈、②朗読から見える詩の分析、③音楽の分析・具体的な演奏法について、この3つの観点で行う。

#### ① 詩の解釈

筆者自身が詩の対訳を行い、その詩から読み取れる内容を解釈する。

#### ② 朗読から見える詩の分析

詩を朗読から見える音の流れから分析して行く。英詩には音としての韻律があるものであるが、クイルターの音楽の魅力は言葉が語り掛けられるように作曲された歌唱旋律にある。日頃朗読を勉強している英語を母国語とする友人の協力の元、取り組む。

#### ③ 音楽の分析・具体的な演奏法について

具体的に例を出しながら、詩のリズムと音楽の作りから導き出される演奏法について考察する。

第3章ではこれまで考察してきたものを踏まえ、全体に共通する音楽の特徴を項目ごとに提示する。結論として、母音を響かせて歌唱するように、子音にも響きを持たせることの重要性に気付くことが出来た。特にこの歌曲集においては、n、l、s、zの音が多いようだが、英語の、lの音やnの音は舌先を前歯の後ろに付けて発音し、sの音とzの音は上下の前歯を合わせて響かせることによって発音される。これらには日本語にはない音の子音も含まれており、朗読する際により意識して発音されるべきである。英詩の場合、これらの音で押韻されていることが多いので、より強調される必要があり、歌唱する場合にはなおさらそうであるといえる。このことに留意して、歌唱してみると初めに頭に浮かんだ音楽と詩とが融合された姿がようやく見えてきた。

### (総合審査結果の要旨)

本論文は、音楽と詩が融合されたクイルターの理想とした歌唱旋律のあり方を研究したものである。R.クイルターの歌曲集「7つのエリザベス朝の歌」Op. 12を研究の対象に、第1章でその成立を記述。この章に関しては残された作曲者自身による演奏録音の事等、更に深める等の練り直しが欲しい所である。第2章、分析と演奏法では、演奏者の立場からの丁寧な考察が行なわれており、演奏する者にとって、大変有意義な成果を提供している。また、テキストの朗読に重きを置き、そこから見える詩の分析を行った事は、本研究の目的とした「歌唱旋律の深求」への大きな力を生み出している。

その研究の裏付けを持って行なわれた学位演奏会では、プログラム後半で「7つのエリザベス朝の歌」の詩の朗読を演奏者自ら試み、続く全曲演奏を行った。朗読はまだ様々な可能性を含んでいるが、今回は歌唱探究の1つの方法として価値があり、大きな成果につながっていた事は間違いない。語る様に歌う演奏者の、時には危うい程に入り込んだ歌唱と懸念された面もある程であったが、この演奏者に備わった声楽的技量の確かさと感性の柔軟さをして、決してその品格を崩すことにはなり得ない。限界ギリギリの表現の可能性を見せてくれた大担で頼もしい演奏であった。

以上、演奏・論文総合的に審査員4名全員一致で「(削除)」の評価であり、合格と認めた。